

2025年3月9日大齋節第1主日

申命記 26章 5-11節

ローマの信徒への手紙 10章 8b-13節

ルカによる福音書 4章 1-13節

先週の水曜日、大齋始日の礼拝から大齋節に入りました。大齋節は、復活日を迎えるための準備の40日間（日曜日を入れないで数えて）です。40という数字は、『聖書』の中では特別な意味を持ちます。ノアの箱舟の四十日四十夜、先週の箇所に関連したモーセが十戒の板をいただく期間の40日、また、出エジプトの旅路も40年です。本日の福音書箇所、イエス様の荒野の誘惑の物語も40日です。『聖書』において、何かが起こる、あるいは何かのための数・期間として、40という数があるといえます。その意味で大齋節の40日という長さは、復活日を迎える準備、それを日数に置き換えるならば、40日必要であるということです。今年もイエス様の復活の意味をより深く心に刻むために、40日を過ごしたいと思えます。

さて、本日の旧約日課は、40年の荒野での旅路を終えたイスラエルの人々が、主なる神様が与えてくださるカナンへの地に入る際の出来事です。新共同訳聖書の小見出しは、「信仰の告白」でしたが、新しい聖書協会共同訳では、「初物を供える」となっています。この箇所は、イスラエルがその信仰を告白する具体化の一つとして、カナンへの地に入った時の実りの初物を、主なる神様に供えることについて述べていますので、どちらも内容に則しています。

本日の箇所は、「あなたの神、主があなたに相続地として与える地に入り、それを所有し、そこに住むときには、あなたの神、主が与える地で取れた、その土地の実りの初物すべてを取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ぶ場所に行きなさい」（申 26：1-2）と始まります。「初物」とはもちろん最初に収穫される作物のことですが、カナンへの地に入った時の最初のことなのか、あるいは毎年初物をとということなのか、あるいは新しい作物は毎回初物をとということなのか、詳細は分かりません。大切なことは、その実が取れる土地、「相続地として与える地」が、主が与えてくださった土地であるからということです。新共同訳と口語訳では「嗣業」という訳でしたが、それは主なる神様がイスラエルに与えたという『聖書』独特の用語です。

それゆえに5節から「あなたは、あなたの神、主の前でこう言いなさい。「私の先祖はさすらいのアラム人でしたが、少数の者と共にエジプトに下り、そこに寄留しました。そしてそこで強くて数の多い、大いなる国民になりました」とイスラエルが出エジプトの出来事を振り返るための文章が始まります。新共同訳で「告白しなさい」と訳されていた部分は、直訳に近い「言いなさい」になりました。

この5節の中ですでに大切な事柄が二つあります。一つは、「さすらいのアラム人」という表現です。新共同訳では「滅びゆく一アラム人」でした。これには、「さすらいの、流浪の」を意味する言葉が、本来は「滅びる、滅びゆく」

という意味であるからです。「さすらうまま滅びゆく」ような「アラム人」であったということです。「アラム人」は、民族名でも王国民名でもありません。アラム地方に住む人という意味です。アラム地方はどこかという、シリアからメソポタミアの北部（現在のシリア、イラク、イランあたり）です。文語訳では「憐然（あはれ）なる一人のスリア人」となっていました。文語が一番よいような感じですが、これらの表現が意味するところは、カナンの地を与えられたイスラエルは、特別ではない、特別どころから主なる神様がいないければ、滅んでしまうようなあわれな人々であったということです。次に大切な事柄は、「寄留しました」という表現です。この部分の翻訳はどの『聖書』もほぼ同じです。「寄留」とは一定期間だけ住むことですが、それ以上にその場所に関する権利や、その土地からの保護を持たないことを意味します。イスラエルは、あわれな一遊牧民であったが、主がそこに住むことを許されたので、今カナンの地に存在できる、これがイスラエルの起源であり、またイスラエルの歴史の始まりの一つです。

もちろん、『聖書』は、世界の始まりを天地創造であると示し、イスラエルもそこに起源を持ちます。しかし、天地創造は、すべての造られた存在の起源です。イスラエルとは、そのことを忘れないための存在なのです。だからこそ、特別ではない「さすらいのアラム人」が選ばれて、今カナンの地にいる。そのことを通して世界のすべての人に、主なる神様の存在が示されるということです。

40年関連でいえば、ある大統領の「荒れ野の40年」、「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在にも盲目となります」という有名な言葉があります。多くの知識人が大切な言葉としていますが、わたしはあまり好きではありません。「盲目で何が悪い」と思いますし、歴史を学ぶことの大切さは分かりますが、人間がそれぞれの価値観と観点、あるいは利害で過去を見て歴史を書き上げるので、その違いから争いが起こるからです。歴史を学ぶことは大切ですし、『聖書』が示すイスラエルの歴史もその一つです。しかし、ここで語られている事柄は、人間が勝手にその始まりを、自らの起源を作り上げるなどということです。なぜならば、与えたのは主なる神様であるからです。見るべきは、過去ではなく主なる神様なのです。だから希望をもって、今と未来を見ることができのです。それゆえに、ここから学ぶことは、主なる神様に対する謙虚さであり、そこから来る人と人とのつながりです。その意味では、今イスラエルという国があり、そこにおいて悲しい争いが続いているようですが、それは主なる神様の与えた土地であることの示し方が、間違っているからだと言えます。

本日の福音書が示す通り、イエス様も宣教活動が始める前に、荒野で誘惑を受けました。それは、主なる神様と向き合うためであったといえます。かつて「さすらいのアラム人」であったイスラエルのように、荒野で何の保護も守りもない状態で、主なる神様と向き合うためです。イエス様もそこから道を示され、宣教活動が始めたのでした。もうすでに大斎節は始まっていますが、今年も実り多い時を過ごし、一人ひとり神様と向き合いたいと思います。